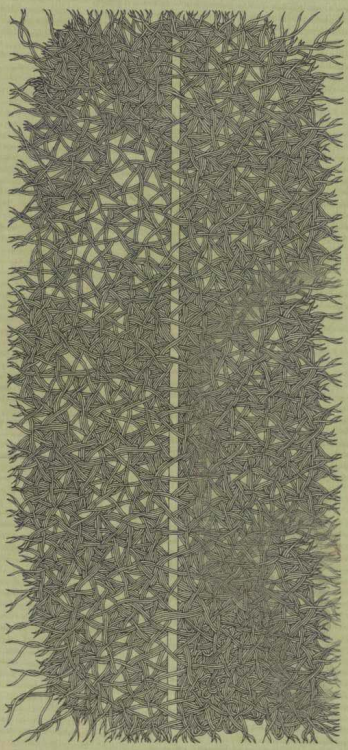
遠藤周作の研究

遠藤周作の研究



実業之日本社

遠藤周作の研究

昭和五十四年六月二十五日　初版発行

編　者　泉　秀　樹

発行者　増　田　義　和

発行所　実業之日本社　一七〇〇円

本社　東京都中央区銀座一―三―九

電話　〇三（五六二）四三一一

振替　東京一―三二六　〒一〇四

支局　大阪市北区曽根崎二―十二―七

梅田第一ビル

電話　〇六（三一二）一五七三

印刷所　東京研文社

製本所　共　文　堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

© 3095―506080―3214

1 遠藤周作の文学……9

遠藤周作の世界……村松　剛　10
『哀しい眼』の想像力……佐伯　彰一　19
切支丹――信仰と文学の結節点……武田　友寿　30
『海と毒薬』……平野　謙　38
わがキリストを〈遠藤周作〉……竹西　寛子　42
遠藤周作における母のイメージ……佐藤　泰正　48
批評家としての遠藤周作……松本　鶴雄　54
〝対決〟のはざまにあるもの……小坂　真理　61
ユダの哀しみ……利沢　行夫　69
『イエスの生涯』の作品分析……武田　勝彦　82
『沈黙』以後の遠藤周作……上総　英郎　88

2 作品についての考察……98

カトリック作家の問題……服部　達　98
フランスの大学生……高山　鉄男　101

遠藤周作の研究　目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

月光のドミナ……平岡　篤頼　104
マリアのいたわりを希求する……田中　澄江　109
ぐうたらとキリスト教……佐古純一郎　112
〈沈黙する神〉と転向……高橋　和巳　115
背教者の苦悩と悦び……江藤　淳　118
轉んだ神父たち……河上徹太郎　122
母なるもの……藍沢　鎮雄　130
『鉄の首枷』について……司馬遼太郎　135
力作、遠藤氏『薔薇の館』……中村　光夫　143
遠藤周作の戯曲……矢代　静一　146
遠藤周作とドラマ……三浦　朱門　148
日本のカトリック作家：遠藤周作……フランシス・マシー　152
モーリアックと遠藤周作……高橋たか子　164

3 作家の声……169

討論
小説の中の日本的風土……山本　健吉　170
現代を救うもの……遠藤　周作　174

神と人間性の追求を……山本　健吉　177
文学―弱者の論理……三好　行雄　180
『死海のほとり』をめぐって……江藤　淳　203
キリシタンに学ぶもの……海老沢有道　212
神とユーモア……井上ひさし　225

対談

4 遠藤周作という人間……245

さらに遠藤君に期待する……佐藤　朔　246
遠藤君とフランス……白井　浩司　247
ケチ同志……佐藤　愛子　250
ヤマシサから出た嘘……安岡章太郎　251
ユーモアと話術……吉行淳之介　253
金貨ジャラジャラ……北　杜夫　257
奇人狐狸庵……阿川　弘之　258
冒険心に富む人……梅崎　春生　262
遠藤さん・旅行・私……秋野　卓美　263
ペテン「師」のこと……金田浩一呂　267

夢のような約束……大原　富枝　270
遠藤さんのこと……上原　和　274
遠藤周作について……亀井勝一郎　278
不可能への飽くなき挑戦……高堂　要　278
やさしさと情熱と……井上　洋治　280
リヨンのことなど……小川　国夫　282
敬虔なカトリック教徒……大久保房男　284
嘘つき聖人……瀬戸内晴美　286
年譜……広石　廉二　294
収録作品初出一覧……308
編者あとがき……310

装幀　前川　直

遠藤周作の研究

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

1

遠藤周作の文学

遠藤周作の世界——ピエタについて

村松　剛

1

遠藤周作に電話をかけたら、いまとりこんでいるのでね……といわれたことがある。

「昨日、母が死んだものだから」

沈痛な声だった。昭和二十九年の春ごろだったと、記憶している。

母郁死亡。長年影響を受けた女性だけに、その死は辛かった。

と遠藤は自作の年表——『新潮日本文学　遠藤周作集』——の昭和二十九年の項に、一行だけ書いている。じっさいにこの母堂が、彼とその文学とに投げている影は大きい。しかし当時はそんな事情はぼくにはわからなかったから、なにかお悔みをいってあわてて電話を切った。

遠藤が母堂と、少年時から別れて暮らしてきたことを知ったのは、それから何か月かたってからである。「いまの母は、実母ではないのや」と、そのころまだ独身で経堂に住んでいた彼を訪ねたときに、遠藤はぽつりといった。「母はモギレフスキーのお弟子でね。」モギレフスキーの名は最近ではすでに、歴史の中に埋もれかかっているようだが、日本に多くのヴァイオリン奏者を育てたことで知られていた。

彼の母堂はそのモギレフスキーの下で、有島生馬氏の令嬢などといっしょにヴァイオリンを学んだとのことである（有馬氏の鎌倉の邸にも、この当時遠藤に誘われて一度だけ伺ったことがある）。だがそれ以上のことは、遠藤はなにもいおうとはしなかった。身の上話の含みがちな感傷や甘えをきらっていたのであり、その点での潔癖さは二〇年後のいまもそれほど変わってはいない。彼は自分の少年時を、むしろ「ぐうたら」に喜劇化してえ

がき出そうとする。

「私小説を書こうと思えば、たねはいくらでもあるのや」と三十歳をこえたばかりの遠藤は、ぼくがそのころ借りていた陋屋の縁側で膝をかかえてよくいっていたものである。「そんなもの、書きたくない」。

私小説のかわりに、彼はフランスやカトリックやとくにマリアについて熱心に論じた。日本ではキリスト教というと明治以後流入した清教徒思想のイメージがつよく、したがってきびしい父なる神、罰する神のほうが強調されすぎると彼はいった。その傾向はいまでもあるだろうが、二〇年まえにはたしかにそうだったと思う。ヨーロッパに行く人びとはごくかぎられていた時代であり、つまりカトリックの文化社会を知っているひとはまだ少なかったのである。

キリスト教の神は、たんに罰する神ではないと、彼はそのころ――というよりもそのころから――くりかえしいっていた。愛する神、許す神こそが、大切なのだ、昭和二十九年七月刊行の『カトリック作家の問題』のなかで、遠藤は「いじらしい程、泣き訴え」る神をえがいている。

それ（告悔）が出来ぬなら、私も拒絶しつづけてもいいんだよ、だが、もう嘘はやめにしなさい。家にかえり、お前の妻に別れを告げ、情婦と暮すがいい。生きていればお前は遅かれ、早かれ、いつかは私のところへ戻ってくる。（「憐憫の罪――グレアム・グリーン『事件の核心』」、傍点は原著者）

グレアム・グリーンの小説『事件の核心』では、病妻と愛人との両者への愛情に引きさかれる男の心理が主題となっている。ついでだが遠藤の後年の短編『四十歳の男』（昭39）には、このグレアム・グリーンの小説の構図がなにほどか投影されているように思われる。

愛する神、許す神の部分をもっともよく代表しているのは、いうまでもなく聖母マリアであろう。母なる神であり、その母なる神の姿を端的にあらわしているのがたとえばピエタである。ピエタは直訳すれば「憐れみ」ということになるだろうが、十字架上に死んだ息子イエスの体を抱いて、かなしみにくれている悲母像をさす。

ミケランジェロをはじめ、無数の画家・彫刻家がピエタをえがいてきた。ただしミケランジェロの有名なピエタ（ヴァティカン蔵）については、あのマリアはどちらかというとギリシア的明快さをただよわせていて、大工のかなしい妻であるには少々きれいどとすぎるように感じられるのだが。

ピエタ像は大きな主題として、まだ小説を書きはじめる以前の遠藤の脳裏に明滅していたようである。彼はしばしばそのはなしをした。しかしこちらは当時、まだ大

学を出たばかりでヨーロッパに行ったこともなく、したがってピエタ像の実物に接したことがなかったから、まことに歯がゆかったにちがいない。「わからないかなあ」と彼はいった。「おまえもはやく、フランスに行って来いよ……」。

前記の年表によると、遠藤の両親が離別したのは彼が十歳の年である。

昭和七年（九歳）　この頃から父母が不和となり、毎日暗い気持で学校に通った。

昭和八年（十歳）　父母の離婚により、母につれられ日本に戻り、神戸市の六甲小学校に転校。神戸にいたカトリック信者の伯母に夙川の教会につれていかれ、以後、他の子供たちと共に公教要理を聞く。十年（十二歳）洗礼を受ける。洗礼名ポール。

しかし何年かののちに、遠藤は母堂と別れ父の家に移っている。このときの事情は、年表にはしるされていない。

別れた母堂はカトリックであり、したがって遠藤にとってはカトリックは母なるものとはじめからつながっていた。カトリックを棄てることは、母を拒否することを意味するだろう。そのことにぼくが気がついたのは、やはり一、二年たってからだった。

遠藤の信仰には母なるものが結びついていると、ぼくはいくども書いたし（昭38、角川書店刊『昭和文学全集安岡章太郎・遠藤周作集』解説、その他）いいもしたが、彼はその都度だまっていた。遠藤自身が母親のことを信仰との関連で正面からえがいた作品は、昭和四十四年の『母なるもの』が最初である。なおこの小説では、「私」が母の死にあったのは中学時代だった、という設定になっている。

2

「ヒルダ（マリアの象徴）」と、遠藤は雑誌「批評」に発表した「『海と毒薬』ノート」にしている。

ぼくが描きたいのは――ぼくとしては最初の試みであるが――女である。悪の意志にひきこまれる（エバ）としての女である。（いわば、誘惑の女）としてである。

彼女は看護婦学校を卒業し、満鉄の社員と結婚するが、懐妊した子どもが腹中で死んだために子宮除去の手術を行なって母性を喪失し、男とも別れる。「結婚によって失ったのは母性である。マリアではなくエバとなること」と前掲のノートにはあり、作中でもほぼそのとおりに物語は進行している。

その母性を失った看護婦――「エバ」――が、栗色の

髪の少年を子供にもつヒルダに嫉妬する。ヒルダは大学の外科部長の夫人で、毎月三回ずつきまって病院に姿をあらわし、手製のビスケットをくばったり、大部屋の施療患者たちの汚れた下着を集めて歩いたりしている。汚れた下着は、次のときまでに自分できれいに洗って患者たちに手渡す。

看護婦の「エバ」はヒルダと二、三の事件から衝突し、ついにはヒルダが「母親であり聖女ならば、女の生理を根こそぎえぐりとられたわたしは（中略）淫売になってもかまわない」とまで、思うようになる。彼女は助手に身を委ね、またヒルダの夫が捕虜の生体解剖という「悪魔」的所業を行なうのを手伝って、意地悪い満足感を味わうのである。

とはいえここにえがかれているヒルダは、母性的であり貧者にたいして献身的である点でマリア的であるとしても、マリアそのものの崇高さはもっていないだろう。作者もむろん、そのつもりで書いてはいない。彼女は自分の慈善行為が、患者たちの多くにとってむしろ有難迷惑であることに無頓着だった。

大部屋には空襲で家族を失った身よりのない老人や老婆が多いのですが、彼等はこの西洋人の婦人が自分に話しかけてくれるだけでも固くなってしまいます。その上古びた行李や信玄袋から、ヒルダさんが汚れた腰巻などを引きずりだすと、あわててベッドから這いおりるのでした。

「このままでようございます。このままにしてつかあさい。」

滑稽なことにはヒルダさんは病人の恥ずかしさや気づまりに気がつかないようでした。

彼女は自分の子供に看護婦が手をさしのべると、「触れないで下さい」ときびしい声を出す。看護婦の手が消毒されていないことを、きらったのである。ヒルダは敬虔だが一種ゲルマン風の合理主義者として、この物語のなかを歩きまわっている。

『海と毒薬』の主題は、一口にいってしまえば日本人の罪の意識ということだった。

日本人とキリスト教世界との道徳観の相違は、遠藤の作家としての出発いらいの主題である。このことはすでにひろく知られていることだし、遠藤自身いくども説明している。

私は仏蘭西に行った時、何よりも羨望を感じたのは、あの国の何処にも基督教というものがしみこんでいたことです。丘の中に島の中に、土地の中に、長い長い基督教のにおいや風習や感覚が根をおろしていたのです。どの村にいってもそこにはひなびた

教会がある。その教会の周囲に人々は生活し、働き、死んでいく。野原には古い聖母像がある。(『私と基督教』)

だが私たち日本人の方にはこうした基督教の歴史も伝統も感覚も文化の遺産もありません。(中略)もっと怖しいことはこの日本人の感覚には基督教をうけ入れない何ものかがあることなのです。(同右)

ヨーロッパを旅行してたいていの日本人が感じるのは、歴史と文化伝統との重みであろう。歴史という点では日本のほうが、ギリシア・ローマの古代をべつに考えればヨーロッパより古いのだから、正確には石づくりの建物とともに保存され蓄積され、今日まで生きている伝統の重み、といったほうがいい。遠藤はカトリック教徒だから、当然のことながらそこになによりもキリスト教の文化伝統の重みを見いだし、日本の場合と対比することになる。

日本は古い歴史をもつ工業国のうちで、一神教をついにうけいれなかった世界で唯一の例である。

一言で申しますと、日本人の感覚の中には神(一神教の神)を必要としないものがひそんでいると言っても差支えありません。

それは何故だろうと私は当時、この神を必要としない日本人の感覚に一種の恐怖を感じながら、しかし自分の周囲やいや、私自身の中にさえ発見したのでした。(前掲書)

日本に、一神教の育つ素地がもし本当にないのだとすれば——それを肯定してしまえば——、カトリック者としての遠藤周作の自己否定である。しかもそのことは、遠藤の場合には母なるものとの絶縁につながってゆく。逆に日本的なものを見ないでいることは、自分の感性を欺くことになる。

東西文化論は明治いらい、いくどとなく論じられてきた主題だが、遠藤にとってことがらは単に理念の問題ではなかった。母なるものを媒介として、東西文化の対立はここにはじめて血肉化されたといえるかもしれない。日本に伝統的な感性を、遠藤は汎神論的世界といい、「物憂い虚無に覆われている」世界と呼び、底無しの泥沼のような状態とも書いている。

『海と毒薬』で彼がえがき出そうとしたのも、それだった。ヒルダはそのなかで、ただひとりの白人として、日本人のすべてに対立する存在として登場する。「机をたたいているヒルダさんの右手は(中略)、砂のようにガサガサとした感じです。」と、日本人の看護婦は述べている。白く乾いてガサガサとした膚という表現は、日本

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com